

1列王記 12章 28-30節 「コンビニ礼拝」

1A 近くて便利な礼拝

1B 自己肯定

2B 二人の主人

2A 自分たちの神々

1B 肉に仕える神々

2B 得られない助け

本文

列王記第一 12章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、列王記第一 12章まで来ました。午後に 12章から 14章までを学びます。イスラエルの国がソロモンの死後に分裂して、北イスラエルと南ユダに分れるところを学びます。今朝は、12章 28節から 33節に注目したいです。

28 そこで、王は相談して、金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もう、エルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上ったあなたの神々がおられる。」29 それから、彼は一つをベテルに据え、一つをダンに安置した。30 このことは罪となった。民はこの一つを礼拝するためダンにまで行った。

北イスラエルのヤロブアムが王となり、彼が王となって初めに行なったことが今、読んだ箇所です。王国が分裂したけれども、神殿のあるエルサレムは南ユダに位置します。そうすると、北イスラエルにいる人々も、礼拝するところが南ユダの領地内にあるので、心も南に傾いてしまうかもしれません。そこで彼は、イスラエルの最も北にあるダンと、また最も南にあるベテルにそれぞれ、祭壇を造りました。そこで金の子牛を造りました。金の子牛は、エジプトで拝まれている偶像ですが、彼は王になるまではエジプトに滞在していたので、そこからその考えを仕入れてきたのでしょう。それだけでなく、彼は都合の良い祭司を選んで、その祭壇で仕えるようにさせました。祭りの日にちも、第八の月と勝手に決めました。イスラエルの暦では第七の月の十五日が仮庵の祭りです。そのようにして、国を新しく始める時から、まことの神、主から離れる偶像礼拝を自分の民に行なわせたのです。

1A 近くて便利な礼拝

私たちがイスラエル旅行に行った時に、このダンに立ち寄りました。そこには、この祭壇の遺跡がしっかりと残っています。その祭壇の上で私が行なったメッセージが、今朝の説教題「コンビニ礼拝」でした。実は、エルサレム以外のところに祭壇を造ったのは、ダンだけではありません。少なくとも、私たちが訪れたネゲブ沙漠の北の入口にある、アラデとベエル・シェバにも同じように礼拝するところがあります。祭壇と聖所の造りは、エルサレムにあるのととても似ているのです。けれど

も、肝心の聖所のところでは、イスラエルの神ヤハウェだけでなく、他のカナン人の神々を祭っていたのです。まことの神をあがめながら、かつ自分たちの欲する神々を同時にあがめていました。

なぜ、こうなってしまったのでしょうか？ヤロブアムの言葉に、その真髓があります。「もう、エルサレムに上る必要はない。」北イスラエルからエルサレムに行くのは、長旅に出なければいけません。けれどもヤロブアムは、「そこまで行く必要はない。近くで礼拝することができるのだ。」と誘ったのです。

いかがでしょうか？理屈にかなっていますね。主なる神が私たちの近くにおられるなら、どうして遠くにある礼拝の場まで苦勞していかなければいけないのでしょうか？

しばしば、人間の理屈では正しいことが、神の命令においては間違っていることが数多くあります。私は牧者であります、宣教師でもあります。海外宣教の経験もあります。けれども、外国人のクリスチャンからいろいろ言われました。「日本は宣教地なのに、どうして海外宣教に出るのですか？」この話を日本にいるアメリカ人の宣教師に分かち合ったら、「ああ、アメリカでも言われるよ。僕はジョージア州出身だけれども、『ジョージアにもたくさん救われていない人がいるのに、どうして海外に出る必要があるのか。』と尋ねられる。」そして、「その考えは理屈にかなっているけれども、聖書的には間違っているんだよね。」とっていました。

そうなんです、イエス様はユダヤ人の弟子たちに何と命令されたのでしょうか？「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。(マタイ 28:19)」けれども彼らは初めユダヤ人だけで固まっていた。けれども迫害が起こり、エルサレムから散らされて、それで異邦人への戸を神が開かれていることを悟ることができました。現地の信者がいるのに、わざわざなぜ敢えて、外国語を学ばなければいけないのでしょうか？他文化をなぜ学ばなければいけないのでしょうか？それは、イエス様を示すためです。イエスは神であられたのに、人になられたのです。イエス様こそ宣教師なのです。私もイエス様を信じたばかりの時、なぜはるばるアメリカから自分の生活を捨てて、わざわざ日本に来ているのだろうか？と思いましたが、そこにキリストの愛を見たのです。遠くにいても自分を捨てて、そこまでやってくるというのは、まさにキリストの御姿だからです。

そして、宣教をしている本人たちにも祝福となります。この命令に従うことにもなう約束が、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。(20 節)」です。自分の落ち着く領域から出て、未知の世界へ、主の命令と、主ご自身にだけ頼らざるをえないところに自分を置くときに、これまでになく素晴らしいイエス様のご臨在を知ることができるのです。宣教師は、宣教地に行くのか、帰ってくるのか分からない、という言い方をします。宣教地に着くと、「ああ、帰ってきた」と思うのです。そこにあるのは主ご自身の臨在です。

ですから、エルサレムにまでわざわざ歩いて行き、礼拝を守ることは神の命令であります、人

間の理屈としてはヤロブアムの勧めは正しいものでした。「すぐ、自分のいるところで礼拝すればよいではないか。」と思います。けれども、神がエルサレムだけに礼拝を集中させたことには理由があるのです。

レビ記 17 章 3-7 節にこう書いてあります。「イスラエルの家の者のだれかが、牛か子羊かやぎを宿営の中でほふり、あるいは宿営の外でそれをほふって、主の幕屋の前に主へのささげ物としてささげるために、それを会見の天幕の入口の所に持って来ないなら、血はその人に帰せられる。その人は血を流した。その人はその民の間から断たれる。これは、イスラエル人が、野外でささげていたそのいけにえを持って来るようにするため、また会見の天幕の入口の祭司のところ、主に持って来て、主への和解のいけにえとして、それらをささげるためである。また、祭司が、その血を会見の天幕の入口にある主の祭壇に注ぎかけ、その脂肪を主へのなだめのかおりとして焼いて煙にするため、また、彼らが慕って、淫行をしていたやぎの偶像に、彼らが二度といけにえをささげなくなるためである。これは彼らにとって、代々守るべき永遠のおきてとなる。」今、読んだところはまだイスラエルが、神殿を建てる前の時、荒野で旅をしている時の命令です。宿営の外で動物をほふっても、それはそこで食べてはならず、主の幕屋のところで祭司に対して和解のいけにえとしてささげなさい、と命じています。

その理由は、「彼らが慕って、淫行をしていたやぎの偶像に、彼らが二度といけにえをささげなくなるためである。」とあります。彼らの周囲に住んでいるカナン人も、同じような形で自分たちの神々にいけにえを捧げていました。だから、あえて主の幕屋に殺した動物をいけにえとして持っていないならば、主にいけにえを捧げているようで、自分の欲を満たすカナン人の偶像を拝むようになる、というのが理由なのです。

私たちの周りには「似て非なる」ものが数多くあります。神の教えの中には、一般社会においても使われている言葉がたくさんあります。「愛」はその典型ですね。「平和」もそうです。「正義」もそうでしょう。「喜び」や「楽しみ」もあります。そして教会として集まっているのであれば、私がこのように指導者として立てられているわけですが、会社でも上司がいるし、また学校では先生がいます。けれども中身は全く異なります。その一つ一つを、キリストを主とし、この方の戒めをじっくりと見、学び、従うことによって見えてくるのです。けれども、似ているからといって、その過程を踏まずにキリスト者としての生活をしようものなら、神の命令と対立することを行なってしまう。どんなに自分の目に好ましいと思われることも、それは肉でしかなく、肉は神に敵対するからです。

そして約束の地に入る前に、約束の地で行なうべきことをモーセは申命記 12 章 13-14 節で話しました。「全焼のいけにえを、かって気ままな場所でささげないように気をつけなさい。ただ主があなたの部族の一つのうちに選ぶその場所で、あなたの全焼のいけにえをささげ、その所で私が命じるすべてのことをしなければならぬ。(申命 12:13-14)」主が選んでくださった一つの場所とは、エルサレムでありました。彼らが相続の割り当て地をもらい、そこに住んでもやはりエルサレムに

上らなければいけなかったのです。

1B 自己肯定

「近くて便利」というコンビニは、現代文化の象徴です。そこに行けば、生活に必要なものは何でも見つかります。けれども、そこで見失われているのは時間と手間です。コンビニのご飯と、自分の母親が作ってくるとご飯が歴然と違うことは分かりますね。お母さんの作ってくれるご飯がおいしいのは、単にその食べ物の物理的な味と自分の舌の味覚が合っている、ということではありません。「愛情がこもっている」からです。相手を愛して、時間を取って手を動かしたからこそ、そこに味わいが出てくるのです。

キリストがこの世に来られた目的がそうです。もし私たちの現代人の感覚で、分かり易いように主が来られたのであれば、この方は決してベツレヘムで生まれることはなかったでしょう。エルサレムの王宮に生まれたはずです。そしてガリラヤの片田舎で活動はされなかったでしょう。宗教指導者のいるエルサレムで、そして神殿の中で宣教活動を行なわれればよいのです。そして、ユダヤ人としては生まれなかったでしょう。彼らがイエスに逆らうことを神は知っていながら、この方をイスラエルのメシヤとして与えられたのです。なぜ、三年間そんな苦勞をして、回り道をしなければいけなかったのでしょうか？天に拡声器でも置いて、「私はキリストだ、私を信じなさい。」と叫べばよかったです。けれども、それを行なわれませんでした。

それ以前に、多くの方が次の疑問を呈します。「なぜ善悪の知識の木を園の中央に置いたのか？それを人が取って食べることを知っていたのに。」また究極的には、「なぜ人が罪を犯すと分かっているながら、人を造られたのか？」と問います。人は理屈を並べたてると、最後には人の存在さえも抹殺するようになるのです。これを功利主義と言います。結果を出すことが全てにまさるといふ考えです。

では、どうして神はそんな面倒くさいことを行なわれているのでしょうか？「神は愛」だからです。神は愛だから、労苦し、犠牲を払われます。神は愛だから、人が失敗すると分かっておられても、それでも人を造られました。神は愛だから、それでもご自分のところに近づくことができるようにいけにえの制度を作られて、人の罪をその流される血によって赦し、神に近づくことができるようにされたのです。ギリシヤ語のアガペという愛は、「自分の利益を求めず、他者のために犠牲を払う」という意味合いがあります。ゆえに、神は私たちの功利主義的な考えからすると、まどろっこしい、回り道をするようなことを行なわれているのです。

ですから、キリストにあって集まる私たちも、愛するために集まります。「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。(ヘブル 10:24-25)」励まし合うために、集まります。世において疲れてしまった人

が、かづけられるように励ますのです。愛と善行を行なうように注意し合うのです。そして「かの日」つまり、主イエスが戻って来られる終わりの日にいるのだから、愛が冷えてつまずきが多くなるこの時代に生きているから、なおさらのことそれを行ないましょう、と言っています。

教会で間違った態度が二つあります。一つは、自分のしていることは正しいと思い込み、また言い張ることです。ここには深刻な問題があります。それは、正しいことを話しているかもしれませんが、態度が間違っているのです。ある牧者がこう言いました。「私が正しい態度を持っているほうが、正しい答えを持っているよりも重要であるという結論です。もし私の答えが間違っているとしても、神は主の真理によって一瞬のうちにその答えを変えることができます。しかし多くの場合、ある態度を変えるのには一生かかるのです。「正しい態度」と「間違った答え」の組み合わせの方が「正しい答え」と「間違った態度」の組み合わせよりも優れているのです。」(「カルバリーチャペルの特徴」チャック・スミス 著 164頁)教会は、正しくさせるのではなく愛していくところです。

そしてもう一つの間違った態度は、「距離を取る」ことです。自分に気の合わない人がいれば、その人から距離を取ります。それで気の利く仲良しだけで集まります。その時にはキリストに仕えているのではなく、自分自身に仕えています。そして究極には、自分だけの礼拝になっていきます。なぜなら、自分と気の合う人などこの世で実は一人もいないからです。その「自分」というのが問題なのに、いつまでも自分以外のものに原因を探しているからです。これはしばしば教会で使われている言い回しですが、「教会は偽善者だらけだから行かない、という人がいる。その人に言えるのは、『行かないほうがよい。あなたが行ったら、その教会が台無しになってしまうだろう。』」

2B 二人の主人

私たちは元々、自分を生かすような性質があります。自分中心で生きていく性質があります。けれども、キリストにある神の愛に触れたものは、その自分を捨てざるを得なくなります。ただ主に感謝して、この方を主として生きていきたいと望みます。

神は私たちにご自分の霊を与えてくださいました。聖なる御霊を与えてくださいました。御霊に従って生きる時に、私たちは絶えず自分を捨てていきます。イエス様は言われました。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。(マタイ 6:24)」「いや、自分を捨てるか、自分を否むとか、そういう否定的なことをしたくない。」と人は言います。けれども、否定しなければ、自我は増大します。肉と言うのは主人にならなければ済まない存在です。自分を何よりも先に優先させます。それで満足しているかといえば、そうではありません。ですから、主の御霊に導かれるためには、キリストを主とすること、そして自分を殺すしかないのです。

2A 自分たちの神々

1B 肉に仕える神々

本文に戻りますと、ヤロブアムは「ここに、あなたがたをエジプトから連れ上ったあなたがたの神々がおられる(28 節)」と言いました。興味深い考古学の研究が最近あるそうです。ダンにおける金の子牛礼拝は、「金の子牛を拝んだのではなく、ヤハウエを拝むための手助けにした。」というものです。これはガイドさんがおっしゃっていましたが、ご本人も「まあ、いろいろなごまかし、言い訳ですね。」というようなことを仰っていました。そうですね、確かに自分自身さえもごまかして、ヤハウエをあがめていると思い込んでいたかもしれません。

「自分に沿うように、手軽に、気軽には」という礼拝は、その行き着くところは必ず偶像礼拝になります。自分自身は「神」という名を使っているかもしれませんが、その神は自分自身の欲求を満たす神、すなわち偶像でしかありません。ちょうど、同じ聖所の中にヤハウエをあがめ、かつカナン人の神をあがめているのと同じです。自分に最も大事にしているものがあり、自分の情熱がそこに注がれています。そのため、神を自分に仕えなければいけない存在にしようとします。けれども自分がその方に仕えることはありません。神の意志が自分に為されることを願うのではなく、自分の意志に神が従うことを願います。実に、神よりも自分のほうが上位にいるのです。そして自分の言っている「神」は、自分の願いと欲求を満たす偶像であるわけです。

2B 得られない助け

しかしヤロブアムは、ダンとベテルにおける礼拝を行なって、自分が困難に差しかかった時には彼は、まことの神に仕える預言者のところに行きました。14 章に出てきますが、自分の息子アヒヤが病気になったのです。ならば、ベテルまたダンに行って、その金の子牛に願いを立てればよいのです。けれども彼は、かつて自分に対してイスラエル十部族を神があなたに与えると預言したアヒヤのところへ、妻を遣わしました。しかも、ヤロブアムの妻だと分からないように変装しなさい、と言ったのです。

つまり肝心の時、困った時には、自分のしていることは頼りにならないのです。それでまことの神のところに来ようとします。「困った時の神頼み」です。けれども、彼は助けを受けることができませんでした。むしろアヒヤは、ヤロブアムの家を神は完全に除き去ると宣言しました。事実、彼らの家は粉々にされました。

ですから、私たちは神の方法で神をあがめなければいけません。勝手に、自分の近いところで、つまり自分の方法で神をあがめてはいけません。もしかしたら「それでは神は私を奴隷にしようとするのですか？自分のものはすべて捨てろというのは、まるで奴隷のようにこき使うのかしら？」と考えるかもしれません。けれども、そう考えないでください。主は確かに、みなさん一人一人を、ご自分の所有にしたいと願っておられます。使徒ペテロは、「あなたがたは…神の所有とされた民です。(1ペテロ 2:9)」と言いました。

けれどもそれは、厳しく労働を使役する主人の所有ではなく、愛してやまない人が相手と結婚したいというのという願いです。愛には、「自分」というものがなくなります。神はご自身をキリストにあって捨てられました。キリスト、ご自分の独り子を見捨てるなんていうことは、全く自分のことを度外視しておられます。皆さんをご自分のものにするために、皆さんにご自分の全てをお捧げになったのです。それに応答するのは、どうすればよいでしょう。神との愛の関係に入るには、どうすればよいでしょうか。「困ったときに助けてもらおう」という態度では無理なのです。そういう軽々しい関係ではないのです。「私の願うように沿って、物事を動かしてほしい」ではありえないのです。この方をすべてにまさって第一の方とする時、自分のためにご自分の全てを捨て去ってくださった方に自分自身を捨て去ってしまうとき、その愛がとこしえに続くのです。